

研修報告書 No. 25

所属：県外病院研修医

研修先：佐川町立高北健康保険病院

初めての四国、そして初めての高知県に降り立ってから、あっという間に1か月が過ぎました。高知県というと『南国土佐、暖かい海の県』というイメージでしたが、空港から病院に向かう道中は延々と山々が連なり、その光景にまずは驚きました。

そんな景色を見ながら高知県を東から西へ走ること約2時間弱、到着したのは高知県高岡郡佐川町にある地域の中核病院、佐川町立高北国民健康保険病院でした。私はこの高北病院で1か月間、主に内科の先生にご指導いただきながら病棟業務を行い、訪問診療や外来、デイサービスなどの見学もさせていただきました。高齢化の進む地域ということである程度は予想はしていましたが、患者の年齢層の高さにはやはり驚かされました。予想をはるかに上回るものでした。一方で、外来患者や訪問診療で訪れる患者、地域の集会所やデイサービスで出会う方々の健康年齢も同じように高く、中でも100歳を超えて独居生活をされている方には脱帽でした。高知県では100歳体操という高齢者の筋力運動の体操が至る所で行われており、予防医学の観点からのこういった取り組みは、地域医療を支える上で重要なものの一つであると実感しました。

『私に専門はないです。なんでもやりますよ、カメラもエコーも。時にはレントゲンも自分で撮ります。総合診療というのは、救急と放射線科と思うんです』。これは内科の先生がおっしゃられた、とても印象に残っている言葉です。昨今は診療科の臓器別化が当たり前になっていますが、地域の医療を担う上では各科横断的な知識が必要なのはもちろんのこと、時折まぎれている緊急性の高い疾患や大きな病院で治療する必要のある疾患を見落とさないために、救急の知識と、最も簡便に行えるレントゲン検査の読影力が重要とのことでした。総合診療という言葉が取り上げられるようになって久しいですが、その定義・解釈においては曖昧な印象が残ります。しかし、長年地域において総合診療を行ってこられた先生のこの言葉こそが、総合診療たるものはなんなのかということを教えてくれたように感じました。

1か月の研修のうち数日間は、仁淀川町にある大崎診療所でも研修をさせていただきました。大崎診療所では、この町ご出身の先生が20年近くにわたり診療を続けておられるとのことでした。交通の足がない方のために診療所受診のための集団バスが走っていたり、積極的に訪問診療や訪問看護に行ったりされており、地域に根差した医療が実践されていました。

また、こちらで驚いたのは診療所の設備です。レントゲンだけでなく CT も設置されていましたが、撮影時には看護師が患者の撮影部位をセッティングし、先生が機器を操作し、撮影後は暗室にてフィルムに現像するという、電子カルテしか使ったことのない私には初めての体験でした。限られた人員と限られた医療資源の中でいかに診療を行うか、地域医療の実際を目の当たりにした気がしました。

JR のことを汽車と言ったり、膝のことをスネと言ったり、土佐独特のイントネーションにも慣れない毎日でしたが、この 1 か月間の研修で、都会の病院では学ぶことのできない、感じることのできない貴重な経験をさせていただきました。今回お世話になった病院スタッフの方々、高知県庁の方々、高知県でお会いしたすべての方々に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。